

法華寺庭園の調査 (平城第632次)

法華寺庭園は、法華寺客殿にともなう庭園です。奈文研ニュースNo.77でもお伝えしたように、本庭園は2019年度から保存整備事業の一環で発掘調査を実施しています。今年度は池北半部を対象に、傾いた築山景石の据え付け状況や池護岸の変遷を解明することを目的として調査をおこないました。

築山北面に設定した調査区(Aトレンチ)では、築山を造った造成土を検出しました。くわえて景石との間に空隙を確認したことから、景石の一部は原位置から動いていることがわかりました。また、現在の法華寺庭園を訪れる皆さんの目を楽しませているカキツバタが植えられている棚の変遷についても確認し、カキツバタの群生範囲が徐々に拡大していたことをあきらかにしました。

池北岸に設定した調査区(Bトレンチ)でも池の護岸の変遷を確認し、岸上では時期は不明ですが礫敷きによる舗装面を確認しました。

今回の調査を通じて、客殿側から庭園を眺める際に重要な要素となる景石が実は原位置をとどめておらず、池の護岸についても時期的な変化があったこと等がわかりました。これによって、今後の保存整備事業を進めるうえで重要な知見を得ることができました。(都城発掘調査部 小田 裕樹)



Aトレンチ調査区全景 (北から)

平城京左京二条二坊五坪の調査 (平城第636次)

平城京左京二条二坊五坪は、南は二条大路に面し、平城宮東院の南に位置することから東院南方遺跡と呼ばれています。いわゆる二条大路木簡の内容から、当該地は藤原麻呂邸であった可能性が指摘されています。2021年3月に、建物建設にともない五坪の西南隅で45㎡の発掘調査を実施しました。その結果、予想どおり表土直下から多くの遺物と遺構を検出しました。地層の堆積も非常に良好で、3面の整地土上で合計8時期の遺構変遷を確認しました。最下層の南北塀は出土した軒瓦から天平期まで遡り、最上層の瓦溜は奈良時代後半期のものです。このうち5時期にわたり、溝や塀等の南北方向の遺構を確認しました。とりわけ南北掘立柱塀を5時期分6条検出したことから、本調査地点では、坪内を東西に区分するための遮蔽施設が繰り返し構築されたことがわかります。

その中間の4時期目では、その前後と全く異なる性質の遺構を検出しました。それは周囲に溝を巡らせて、一辺が1～2mの格子状の区画を造るいわゆる方形区画遺構と呼ばれるものです。近年の平城宮東院やコナベ古墳南方遺跡等の調査成果から、竈^{かまど}に関わる遺構の可能性が指摘されています。このことから、当該地では南北方向の遮蔽施設が奈良時代を通じて繰り返し構築されていましたが、4時期目のみそうした区画ではなく、厨^{くりや}の性格をもつ施設が広がっていたことが新たにわかりました。

(都城発掘調査部 国武 貞克)



奈良時代前半の南北掘立柱塀 (写真右の柱列)